

---

# 天然の鈍感は可愛い

神童サーガ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天然の鈍感は可愛い

### 【NZコード】

N4334F

### 【作者名】

神童サーラガ

### 【あらすじ】

天然な少年のことが好きな三人の愛は届くだろうか？。男の子も出ますが恋愛では無いから、微BLですね。後の二人は女の子です。オチ無しです。

「ナオ君～！～」

初めまして、河村 かわむら 直 すなおです。

皆から（約一名以外）は、ナオって呼びます。  
今、僕の名前を呼んだのは友人のセツナ君。

「ナオちゃん～！～」

この子は、女友達のサクラちゃん。

「・・・直」

この子が例外の女友達のマナちゃん。  
とりあえず僕の友人達です。

セツナ君の性格は、犬みたいだけどガタイが良い。で、僕に毎回抱き付いてくる一人。

サクラちゃんは、甘えんぼな子犬みたい。で、僕に毎回抱き付いてくる第二号。

マナちゃんは、一番大人で猫みたい。セツナ君はツンデレと言つてるけど分らない。

「セツナ君どうしたの？」

「デートに行こうよ~」

「逛つて来い」

抱き付きたがり言つセツナ君。マナちゃんも相変わらず冷たい反応だね。

「ナオちゃん私と行こうよ~」

「お前だけ炒つて来い」

炒つたらダメじゃないかな？

「・・・直はどうしたいの？」

「僕？うん。公園でのんびりしたいなあ」

あまり出掛けると二人が、周りに迷惑かけるし。

「マナちゃんは、それで良い？」

「・・・私は本読むか」

良いなあ。僕も持つて来れば良かつたなあ。  
そして、既で公園に向かつた。その時も、一人は僕に抱き付いて  
る。ちよつぴり迷惑かな。  
芝生に座るみんな。

「これ読む?」

マナちゃんが、本を貸してくれた。

「つまんない~」

「ナオちゃん膝枕!~」

セツナ君の言葉に続けと、サクラちゃんが膝枕を強要してきた。

「僕なんかじゃダメだよ

「柔らかくて良いじゃん!~」

僕の抗議も無駄だつた。マナちゃん・・・お願ひだから助けてよ。  
本読んで無いで。

「・・・あまりしつここと嫌われるよっ。」

マナちゃんの発言に「石になつた」一人。  
その方が嬉しいけど、つてマナちゃんの小声が聞こえたけど意味  
が分からなかつた。

「好かれてるね。直

「え～モテないよ。僕

だつて、今までモテたことなんて無かつたし。

「（鈍感なんだから。まあそこが可愛いんだけど）

「（可愛いなあ～やつぱつ俺の嫁にしたいぜ）

「（やっぱ私は好きだよーー）

マナにセツナにサクラは、それぞれ直が好きなのです。でも、鈍  
感な直のせいで、苦労人な三人。

自分は、三人以外に嫌われていると思つてゐる直です。

「どうしたの？三人共？」

「うえ？」

「何でも無いわ」

吃了たセツナを無視して答えたマナ。  
みんなは、首を傾ける直を見て可憐いなあ、と思つてゐる。  
正確には、マナ以外萌えてます。

「マナちやんってシンデレラ？」

「はあ？」

急に言われた発言に真っ赤になつたマナ。

「セツナ君が言つてたの」

「セーツーナーーー！」

マナは、赤い顔のまま本の“角”で殴つた。しかも容赦無く。

「うわあ『テレじゅなくて怒つてるよ』

サクラは、この場に不釣り合いな発言をしてる。

「ハアハア・・・ツンデレって・・・」

動搖してるマナ。両手で顔を押さえてる。しかも、直はクールじやないけど可愛い、と思つたらし。

「ねえ・・・ナオちゃん」

「な・・・なに!?

急に抱き付かれて顔を赤らめる直。胸が・・と小さい声がしたが、運が良いのか悪いのか、誰も聞いて無い。

「なあ〜ナオ君さ、俺のこと好き?」

場違いな発言をしたのは、復活したセツナ。一瞬止まつて、ハツとした。

「う、うん・・・」

直の曖昧な返事に、興奮したセツナ。

「・・・」

マナの場合は、一人みたく積極的になれないから、黙るしか無い。

「どうしたの? マナちゃん」

何でも無いよ、と笑顔で言つたが陰りがある顔だった。

「顔色が悪いよ?」

顔を覗かれてるから、直の上田遣にて動搖してゐるマナ。

「あ、いや・・・」れあげる……

直に投げ渡したのは、キャンディーだった。一種の照れ隠しです。サクラは、シンデレ来たあ、と思つたみたいだ。

「何すんだあー?」

「ナオちゃんって好きな人いないの？」

セツナを無視したサクラは言った。他の人も気になつたらしく、耳をダンボにしてる。

「え・・・好きな人?・・・ん~。いるよ」

一時停止した。分りやすく。

顔が引きつってるみんな。呪つてやる、と物騒なことを考へてる。

「三人共好きだよ?」

典型的に、ズゴーっと転んだ。

マナは、やつぱりか、と分つてたらしい。

「あれ?僕、変なこと言つた?」

三人は、更に直が好きになつたのは言つまでも無い。ライバルが増えたら、三人は力を合わせて、倒すだらつ。直にバレないように・・・。

(後書き)

ホントは、マナ巣窟にしたかったけど、他の一人も好きだから止め  
た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4334f/>

---

天然の鈍感は可愛い

2010年10月31日01時38分発行